

こうこがくてき けんち 考古学的な見地から

黒曜石という石材は、ほぼ均質なガラス質であり、容易に貝殻状断口を作り出すことができる材料であることから、石器などの加工には大変都合の良い石材です。鏃などのように細かい整形作業を必要とする両面加工石器や、スクレイパーやナイフ形石器のような鋭い刃部が要求される裁断石器などに積極的に使われました。

このように考古学分野において、黒曜石は石器製作の材料として重要な役割を果たした石材であると考えられており、早くから研究者の間で注目されていました。



両面加工石器
(旭川市博物館所蔵)



ナイフ形石器
(旭川市博物館所蔵)

その産地ですが、ほとんどが流紋岩質の組成をもつガラス質火山岩であるため、限られた場所から産出します。国内では、北海道をはじめ本州中部・九州地方に集中する傾向があります。従って、黒曜石は先史時代において交易によって原産地から日本各地へもたらされました。

日本各地の遺跡から出土する黒曜石製の石器、又はその原材料が、この限られた黒曜石の原産地から運び込まれたということは、生産地と消費地という需給関係が存在していたことになり

ます。近年、蛍光X線分析法や電子プローブマイクロアナライザー法などによって、遺跡から発掘される黒曜石製の石器が、どこの原産地のものを使用しているのかが明らかにされつつあります。この黒曜石の流通が、どのような形態で行われていたのかは明らかにされていませんが、少なくとも何らかの交易が存在したことは確かであると考えられており、今後、先史時代の様々な交易を推定する上で、黒曜石が大変注目されます。

(学芸員 向井 正幸)



地学 Sheets

Asahikawa City Museum

旭川市博物館HP

